

蕉風の季語・季題論

—その領域と体系について—

東 聖 子

中世の連歌論書の『長短抄』（梵灯庵主）にこうある。

歌道ノ源ハ、春夏秋冬ノ風情ヲ心ニシメテ、恋述懐無常ノ理ヲ
旨トシ、朝夕ノ業ヲアリノマヽニ可云、此心ノ深キ事、千尋ノ
海ヨリモ深、巧ノ高事、富士ノ山ヨリモ高ク、詞ノ廣事、武蔵
野ヨリモ際ナシ、是ヲ以歌道ノ將トセリ、（以下、傍線は筆者。）

梵灯庵は和歌の道の根源は、四季のそれぞれの風趣を心に深く感ずるところから発するという。日本人にはその人の生きた歳の数しか春夏秋冬の四季を体験することはできないという厳肅な事実があるが、日本詩歌の詩人達にとって四季は創作の広大な母胎であった。

昨年、夏石番矢編『俳句』百年の問い¹⁾が出され、近代における「俳句とは何か？」についての正岡子規から三十二人の説、すなわち「俳諧大要」以降の百年の俳句本質論の所説がまとめられた。どの人の論のどこを選びだすかは、異論もあるが、ひとまずの試みである。子規、B・H・チェンバレン、碧梧桐、P・L・クーシュー以下、編者夏石氏まで三十二人の本質論の約半数近くが季語・季題に触れている。たとえば、正岡子規は「俳句には多く四季の題目を詠ず」といい、芥川龍之介は発句には「季題は無用にしても、詩語は決して無用ではない」といい、寺田寅彦は季題は時や空間を決定す

る役目があるといい、篠原鳳作は現代社会の時代性に対応した「無季俳句」を主張し、山口誓子は季語は「歴史的所産として純化されつつ」あるといい、水原秋桜子は俳句は「四季の自然現象及び季節に影響せられる生活のみに取材」し「これは短詩型を活かし、力を包蔵させる」といい、加藤楸邨は俳諧は自然との感合によって人間の存在の真実をその中に浸透させ、「季こそ、十七音の目であり、感合点である」といい、山本健吉は数百年にわたる「歴史の叡智」であり発生史的には季語の存在要件は「外在的」であるといい、鷹羽狩行は季語の役割は内容の背景の奥の第二次・第三次の無意識の世界に拡がり「幽暗」にする機能をもつといい、平井照敏は有季は俳句を自然詩に仕立て、季語が「象徴的に、重層的に、内面的に活用されてゆく」といい、長谷川権は西洋詩や現代詩にない「オリジナルな部分」であり四季の時空を内蔵する「曼荼羅のような言葉」といい、川本皓嗣は発句は基底部と干渉部からなり季語は干渉部に当てられることが多いといい、夏石番矢は二十一世紀にむけて「新しいキーワードをおもに季の外に求めたいという（敬称略）。以上はこの書の抜粋部分における季語論のおもなものを列挙したもので、この書に所収する山本健吉²⁾や井本農³⁾氏他には、このほかに独自の季語・季題論があることは言うまでもない。

これらの近代俳句の本質論の半数近くに季語・季題論がかかわっていること、「四季の題目」から「季題」そして「季語」の名称へと変化して行くこと、また発句独立という近代俳句の性格から連句的世界はあまり視野にないことがうかがえる。

他方、古典俳諧における季語・季題の働きについても現代の諸氏の説があるが、こちらも発句を中心に論じられることが多いように思われる。近世俳諧は季語・季題を形式上の特色としているが、芭蕉と蕉門俳人達はいかなる領域において「季の詞」の理論を展開していたのであろうか。芭蕉の言説と門人達の主要な俳論書においてその〈領域と体系〉を明らかにしたい。

堀切実氏は昨年の「芭蕉俳論体系化への試み」⁽⁴⁾の論文において、芭蕉の俳論の体系化・構造化を試みられ、各論の検討のうえに概略を明示された。待望の画期的な論であった。が、ここでは《対象把握の方法》に「本意・本情」が位置し、《表現の方法》に「取合せ」があり、「発句論」に「季題論」が分類されている。蕉風の季語・季題論はこのみにとどまらない。その正確な領域を今回は確認してみたいと思う。またかつての「芭蕉俳論事典」⁽⁵⁾（別冊国文学8）（一九八〇年刊）はすぐれたものであったが、紙面の関係上詳細な季語・季題論の全体像にはなっていない。

これから、芭蕉の言説と芭蕉直門の主要な俳論書（ただし後の伝書類は省く）において〈蕉風の「季の詞」の理論の領域の確認と体系化〉を試みてみたい。

一 蕉風における季語・季題の名称

「季語・季題」の名称は近代以降のものであり、明治四十年前後に

用い始めたとされる。芭蕉自身や蕉門俳人は何と云っていたのであろうか。

まず芭蕉の用例をあげてみると、次の四種類である。ただし、門人による間接的な伝聞の場合は除外する。

1 季ことば

『笈の小文』（紀行文）

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

と物うさのあまり云出侍れ共、終に季ことばいらす。

2 季の言葉

「杖突坂の落馬」⁽²⁾（俳文二種）

かちならば杖つき坂を落馬哉

といひけれども、季の言葉なし。雑の句といはんもあしからじ。

（『笈日記』）

かちならば杖つき坂を落馬哉

終に季の言葉いらす。

（真蹟懐紙）

3 季節

元禄元年十二月五日付尚白宛芭蕉書簡（書簡）

冬籠又依そはん此はしら

愚句

菊鶏頭切尽しけりおめいこう

同

句はあしく候へ共、五十年來人の見出ぬ季節、愚老が拙き口にかゝり、若上人真靈あらば我名ヲしれとぞわらひ候。

4 季

『初懐紙評註』（評語）

はしは小雨をもゆるかげろふ

仙化

春の景気也。季のつかひやう（は）、かろくやすらかにしたる所を見るべし。花の閉目などは、やすくとかろく付る物也。

芭蕉は「季ことば・季の言葉・季節・季」の四種類の名称を残している。1の『笈の小文』杖突坂落馬の条は、旅中のユーモラスな出来事に興をそそられたらしく、名所における雑の句容認説として諸書にひかれ、2の二種の「杖突坂の落馬」の俳文も伝わっている。しかし、紀行文では「季ことば」、俳文では「季の言葉」と名称を若干変えている。3の元禄元年尚白宛芭蕉書簡は「菊鶏頭」の自句をこれもユーモラスに自賛したもので、「御命講」（旧暦十月十三日の日蓮忌の法会）の詩材を貞門談林以来はじめて見いだしたと言う。この「季節」は単なる季節風景ではなく、後述する門人達の用例によっても季語・季題をさすものであろう。芭蕉は人事の季の詞としての「御命講」に惹かれるものがあつたらしく、後に「御命講や油のやうな酒五升」（元禄五年『小文庫』）の飄逸な名吟を作った。4の『初懐紙評注』は季の詞の用い方は「かるくやすらかに」と語っている。すなわち現存するこれらの用例は、名所に雑容認・かるくやすらかな使用・新しい季の詞への意欲などを述べる中で、前述の四種類の名称を出している。

季ことは (紀行文)

季の言葉 (俳文)

季節 (書簡)

季 (評語)
(他に書簡にも)

文学作品の場

指導・実践の場

おおかた、芭蕉のこれらの名称の使い方は右のようであろう。「季の言葉・季ことば」は公的、「季・季節」は私的とも言えよう。ちなみに近世初期の歳時記類をみると、『はなひ草』（親重）には「四季之詞」、「誹諧初学抄」（徳元）には「四季の詞」、「毛吹草」（重頼）には「誹諧四季之詞」、「連歌四季之詞」、「増山井」（季吟）には「四季之詞」などあり、これらの本文冒頭には「四季の詞」が使われて

いる。「四季の詞」は「季の詞」と同様に改まった公的な場合に多く用いられたことがわかる。

では次に、蕉門俳論書の中から、去来の『去来抄』『旅寝論』そして土芳の『三冊子』における季語・季題の名称をみてみる。ここでは「題」や関連するその他の言葉についても参考に用例をあげておく。なお、本文は古典俳文学大系10『蕉門俳論俳文集』（集英社）に拠った。

『去来抄』

季12 季節6 無季5 題4 四季2

同季1 有季1 夏季1 和哥の題1 十題十句1

放題1

『旅寝論』

題14 季8 無季7 誹諧の題4 哥の題2

和哥の題2 題号2 春季2 季の詞1 難題1

『三冊子』

季13 題8 春季2 哥の題2 当季1

他季1 季つづき1 結び題1 落題1

去来は『去来抄』では「季・季節」を多く用い、『旅寝論』では「季」を多用し「季の詞」も用いた。土芳は「季」のみを多用している。これらは自説のみではなく、先師芭蕉や許六などの説を引用する時にも使われている。ただ、概して言えることは、去来・土芳において「季・季節・季の詞」等が用いられ、若干の個々の門人の傾向はあっても芭蕉の名称の使用と二者のそれはほぼ類似している。他の門人、許六・支考などにおいても同様である。許六は『許野消息』で「季と季の言葉の取合せたる句」、「歴代滑稽伝」で「季と季の辞をとり合する」「連俳は季節の辞を題とす」などと言っている。「季」

は「季の詞(言葉)」の、また「季節」は「季節の言葉」の省略形と
思われる。

つまり、芭蕉は「季の言葉・季ことば・季・季節」等の四種類の
言い方をしており、芭蕉の門人達も「季の詞・季節の辞・季・季節」
等と言っていた。刊行されていた歳時記類は「四季の詞」であり、
「季・季節」は省略形である。蕉風の頃の季語・季題の名称は一語に
定まっていなかった。

二 蕉風俳論書における季語・季題論の領域

蕉風において、季語・季題はいかなる領域でいかなる論が展開さ
れていたのかを見てゆきたい。芭蕉の言説の主要なものと、蕉門俳
人の主な俳論書で考察してみる。蕉門の俳論書として次のものを参
照した。

- 北枝 山『山中問答』
其角 雑『雑談集』
去来 真『真蹟去来文』・不K『不玉宛去来論書』・許K『許六
宛去来書簡』・俳『俳諧問答』・旅『旅寝論』・去『去来
抄』
土芳 三『三冊子』
許六 俳『俳諧問答』・篇『篇突』(李由共編)・字『字陀法師』
(李由共編)・消『許野消息』・歴『歴代滑稽伝』
支考 葛『葛の松原』・続『続五論』・東『東西夜話』・十『俳
諧十論』・古『俳諧古今抄』
野坡 消『許野消息』

その他の伝書 二『二十五箇条』

尚、参考として許六編『本朝文選』・支考編『和漢文操』を見る
こととする。

〈注〉(1) ■は芭蕉自身の言説を示す。また、山・雑等の書名の
前の漢字は、それぞれの書名を示す。

- (2) 本文は、古典俳文学大系10『蕉門俳論俳文集』に拠つ
た。但し、『東西夜話』は『加越能古俳書大観下』、『俳
諧十論』は日本俳書大系9『蕉門俳話文集上』、『俳諧
古今抄』は俳諧叢書2『俳諧註釈集下』に拠った。芭
蕉の言説は古典俳文学大系5『芭蕉集』に拠った。

以下、季語・季題論に関する所説を、いくつかのグループに分け
て掲出してみたい。

俳諧精神

〈不易流行〉

山・天地を右にし、万物山川草木人倫の本情を忘れず、飛花落
葉に遊ぶべし。其姿に遊ぶ時は、道古今に通じ、不易の理
を失はずして、流行の変に渡る。

三・師の風雅に万代不易有。一時の変化あり。この二つに究り、
其本一也。その一といふは風雅の誠也……千変万化するも
のは、自然の理なり。……その誠をせめざる故也。

〈造化随順／天地・四季の変化に従う〉

■ しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。
見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずとい

ふ事なし。……造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

〔笈の小文〕

二

・はいかいは己が家にありながら、天地四海をかけめぐり、春夏秋冬の変化にしたがひ、月はなの風情にわたるものなれば、百句は百句に變化すべき事也。(変化の事)

東・四季の変化をしり、天地の本情にあそぶたつきの物なりとおぼしめし候て、

《俳諧精神》にかかわる季語・季題論は、〈不易流行〉や〈造化随順／天地・四季の変化〉の条で語られる。これらは、天地における万物の本情を見据えて、風雅の誠を責め、四季の変化とともに造化に従って飛花落葉に遊べという。ここで、季語・季題論は四時の変化のなかで、天地における万物の本情を知る精神の遊びであるという、俳諧のひとつの本質論に辿りついている。

対象把握の方法

〈物我一如〉

■ 翁にあらずば誰か此むしの心をしらん。「静にみれば物皆自得す」といへり。(蓑虫ノ説一跋)

三・松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも、私意をはなれよといふ事也。……習へと云は、物に入て、その微の顕て情感るや、句となる所也。

……物と我二つになりて、其情誠にいたらず、私意のなす作意也。

・師の曰「乾坤の姿は風雅のたね也」といへり。……飛花落葉の散乱るも、その中にして見とめ聞とめざれば、をさま

ることなし。……物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。

〈本意・本情〉

■ 砌に高き去年の桐の実 文鱗

……但、桐の実見付たる、新敷俳諧の本意、かゝる所に待る。(初懐紙評註)

続

・有情のものはさらにいはず。無情の草木・瓦石より道具・表色にいたるまで、おのれくが本情をそなへて……金屏はあたゝかに銀屏は涼し。はおのづから金屏・銀屏の本情也。……そも天地よりなせる本情也。……

この本情と風雅のふたつをしりて、はじめて俳諧をしれる人といふべし。(滑稽論)

去

・物を作するに、本性をしるべし。しらざる時は、珍物新詞に魂を奪はれて、外の事になれり。魂を奪るゝは、其物に著する故也。是を本意を失ふと云。

・俳諧は新敷趣を専とすといへども、物〔の〕本性をたがふ(べからず)。(以下「」は本文を補うことを示す。)

三・旅牀の句はたとひ田舎にてするとも、心を都にして、……都の便求る心など本意とすべしとは、連の教也。……東海道の一筋もしらぬ人、風雅に覚束なしとも云り

《対象把握の方法》にかかわる季語・季題論には〈物我一如〉と〈本意・本情〉の条がある。蓑虫や松や竹の心を知るには、私を去り

静観し、物に入ってその微の顕れや、物の見えた光を、瞬時に言い止めよという。有情・無情の万物は、天地のなす本情を持っており、新しみの中にも本情を違えるなという。すなわち、物我一如となつて、物の真実のその本質の姿がたち現れる、一瞬の迫真の時をつか

む秘技を伝えている。

ことば

●四季の詞

〈新しい季語〉

去・魯町曰、「竹植る日は古来々季にや」。去来曰、「不覚悟。先

師(の)句にて初て見侍る。……先師、季節の一ツも探り出したらんは、後世により賜と也。

〈四季の詞の解説〉

四季の詞の意味や本意等の解説については、蕉門諸俳論書でなされている。紙面の関係上、ここではひとつの季の詞はあ

『山中問答』

ナシ

『雑談集』

句の解説に若干、アリ

『真蹟去来文』

ナシ

『不玉宛去来論書』

ナシ

『許六宛去来書簡』

ナシ

『俳諧問答』

去来の条 ナシ / 許六の条 若干アリ

『旅寝論』

問答の解説に、若干アリ

『去来抄』

句の解説に、アリ

『三冊子』

末尾に季の詞の解説を列挙。アリ

『篇突』

全編に季の詞を語群にして解説。アリ

『宇陀法師』

一部に解説、アリ

『許野消息』

両者の解説に若干、アリ

『歴代滑稽伝』

解説に若干、アリ

『葛の松原』

解説に若干、アリ

『続五論』

解説に若干、アリ

『東西夜話』

解説に若干、アリ

『俳諧十論』

ナシ

『俳諧古今抄』

四季の名類の事、44条アリ

『二十五箇条』

解説に若干、アリ

(その他、『本朝文選』の許六「四季ノ辞」「百花ノ譜」・支考「百鳥ノ譜」・万子「愛梅ノ説」他の俳文中にある。また、『和漢文操』にも若干ある。)

●題の論

〈季節の辞を題とす〉

歴・第四に、連俳は季節の辞を題とす。秋季・春季を持といへども、発句にならぬ只事おほし。秋の峯・春の山のたぐひ、似た事にて、春の野・秋の野は題也。先師大根引は題にならずとて、「大根引といふ事を」と前書にかきて出された。一生の秀逸題を撰ぶ。梅・桜・月・雪のたぐいと心得べし。

〈縦題・横題〉

旅・問曰、「許六の説に哥の国・俳諧の国、或は哥の題・俳諧の題と、所々に分られたり。……」去来答曰、「……只和哥の見る所と、俳諧ににらむ所と、趣たがひ有のみ也。縦は花は和哥の題、菜種は俳諧の題と云はよし。花は俳諧の題にあらずと云は非なり。

宇・題に豎横の差別有べし。近年大根引のたぐひを、菊・紅葉一列に書ならべ出する、覚束なき事也。

〈題詠の例〉

雑・此頃、落穂の題にて当座句合、沾徳判、

艸枕置のうへもおちば哉 亀翁

庭鳥の卵うみすてし落穂哉 角

葛・乳麩の下たきたつる夜寒哉

是は曲水亭にて、夜寒といへる題の発句也。

去・「こゝろ見に作てみせん。題を出されよ。」(魯)町、則「露」と云。「露落てえりこそばゆき木陰哉。」「きく」と云。「きく咲てやねのかざりや山ばたけ」と十題十句言下に賦シ、

「……一題を乞て十句せん」。町、「砧」と云。……十句筆をおかせず。「予(去来)は蕉門遅吟第一の名有ルすらかくのごとし。」

〈結題・落題〉

三・師のいはく「結び題の発句などの時に、たとへば五句ある時は、秀作三句は過る也。当座の題は猶其心得あり。哥の題の事もかやうの事とやら聞え侍る」となり。

・定家卿哥に、……「題庭上冬菊」といふにて「霜おかぬ南の海のはまびさし久しく残る秋のしら菊」と詠めり。此歌は浜家のひさし也。しからねば庭の字落題也。

〈花鳥風月以外の題〉

篇・賀・挨拶・追善・懐旧・紀行・移徒・^{わたま}餞別・留別・神祇・釈教・恋・讚之類・前書ノ格・古事・故実・古哥ヲ取ル格

右ケ様の題、常式、花鳥風月の案じ所とは格別也。

●雑の論

〈無季の句もあり〉

二・名所の発句は、都て雑の句もしかるべし。名を云、季を云、

心いふ時は、句作必穩なるまじ。

旅・先師もたま〜無季の句有。……神祇・釈教・賀・哀傷・無常・述懐・離別・恋・旅・名所等の句は無季の格有度物なり。

去・去来曰、「無季の句は折々有。興行はいまだ聞ず。先師の曰、「発句も四季のみならず、恋・旅・名所・離別等、無季の句ありたきもの也。……」

三・師の詞にも「名所のみ雑の句にもありたし。季をとりあはせ、哥枕を用る十七文字には、いさゝか心ざし述がたし」

〈無季に二つあり〉

去・其無季といふに二ツ有。一ツは前後・表裏、季と見るべき物なし。……又、詞に季なしといへども、一句に季と見る所有て、或は歳旦とも、名月とも定るあり。

●その他

〈詞と趣向ノ詞と心と作意〉

去・去来曰、「(句)案に二品あり。趣向より入と、詞・道具より入ると也。詞・道具より入る人は頓句・多句也。趣向より入る人は、遅吟・寡句也。されど、案方の位を論ずる時は、趣向より入るを上品とす。

三・春雨の柳は全躰連歌也。田にし取鳥は全く俳諧也。「五月雨に鳩の浮巢を見に行ん」といふ句は詞にはいかいなし。浮巢を見にゆかんと云所俳也。……詞に有、心に有。其外この句の類、作意に有。

〈俗語を正す〉

三・師のいはく「俳諧の益は俗語を正す也。……

去・行春を近江の人とをしみけり ばせを

先師曰、「尚白が難に〈近江〉は〈丹波〉にも、〈行春〉は〈行歳〉にもふるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや」。去来曰、「尚白が難あたらす。湖水朦朧として春ををしむに便有べし……」。

・つかみ合ふ子どものたけや麦畠

……去来曰、「麦は麻に成ても、よもぎになりてもくるしからず」……先師曰、「又ふる・ふらぬの論、かしがまし」と、制し給ふ也。

歴

・第三に、動く歟、動かぬ歟といふ事をかけて、最初より案ずる也。春風が陽焰に動き、野菊が撫子に動かたぐひ、ひたものあれはと動かし、決定の上にて手尔於葉を改め、句作るもの也。

〈初〉の字大切の事

俳・初雪やいつ大仏の柱だて

翁

……「初」の字のつよみ、名人の骨髄也。(許六)

篇・初霜・初雪等の初字、大事の一字也。腸を厚く案じて、容易におく事なかれ。

《ことば》にかかわる季語・季題論は多い。ここでは、季の詞・題の論・雑の論・その他に大別した。季の詞では〈新しい季語〉〈四季の詞の解説〉、題の論では〈季節の辞を題とす〉〈縦題・横題〉〈題詠の例〉〈結題・落題〉〈花鳥風月以外の題〉、雑の論では〈無季の句〉〈無季に二つあり〉、その他の関連するものとしては〈詞と趣向／詞と心と作意〉〈俗語を正す〉〈ふる・ふらぬ〉〈初〉の字大切の事等の条がある。季の詞では芭蕉は新季語に好意的であり、蕉門俳論諸書に四季の詞の解説がある。題の論では連俳は季節の辞を題とするとし、一生の秀逸は題を選ぶといい、縦題・横題を区別し、俳席や習

作に題詠がなされていた。雑の論では名所等に雑を容認し、季がなくとも一句全体で季を持つこともあるという。その他の論では、詞よりも趣向より入る句を上品とし、俳諧は俗語を正す益があり、ふる・ふらぬの語句の流動性、初字の効果等をも語っている。

表現の方法

〈季の用い方〉かろくやすらかに、後に加える

・はしは小雨をもゆるかげろふ 仙花

春の景気也。季のつかひやうは、かろくやすらかにしたる所を見るべし。〔初懐紙評注〕

葛・月花にかぎらず、春秋の季を結ばむに、その季をさきに工夫せばあたらしき趣向なるべし。唯、平生の心にて当季

は後にくはへたるがよしと承し也。

〈季重なり・季と季の取合せ〉

去・去来曰、「一句に季節二、三有とも難なるべし。……されど許六の、季ト季のかよふ処に習ありといへるは、予が

いまだしらざる事也。」

三・又いはく「季をとり合するに、句のふるびやすき煩有」とありし時も侍る也。

消・先師の申されたる鶯の両句は、季の取合せ第一にて、心の通ふ所を結び合せたるものに候。……

惣別先師の句は、季と季の言葉の取合せたる句、十に七ツ八ツは是にて御座候。(許六)

しかれども句は、しまりを第一にして、新しみを願ひ申事に候。取合せものを尊しとは存ぜず候。……よせ物・取合

せものと心を付候はゞ、作に落入、深々の妙処にいたる事有まじく候。(野坡)

歴・寒菊の隣もありやいけ大根 許六
寒菊にいけ大根、同季のとり合せ也。

〈かけ合せ〉

消・翁の古池の句、いかゞ御聞候や、……此句、蛙と古池のかけ合を能々御工夫あるべく候。(許六)

・兔角かけ合なくては発句にならずと、度々仰承り候。いかなる踏違にて候や。(野坡)

歴・第二に、かけ合といふ事、当流の眼也。……そのかけ合といふは、花にあすならふの木をかけ合し、名月に三井寺の門叩く事をかけ合する也。その中はとり合せよき様につきめを合せて発句にする事也。季と季の辞をとり合するも同前、猶以名人の作也

《表現の方法》にかかわる季語・季題論は、〈季の用い方〉〈季重なり／季と季の取合せ〉〈かけ合せ〉等である。芭蕉自身も季の用い方は「かろくやすらかに」という。そして季の詞は後で加えよとも言ふ。季重なりについては、特に禁じてはいない。許六は季と季の取合せやかけ合せについて主張するが、去来や野坡は疑問を述べている。

ジャンル(形態)別

●発句論

〈発句は取合せもの・題の曲輪を出よ〉

篇・世上、発句案ずるに、皆題号の中より案ずる、是なき物也。

……たとへば題を箱に入置、其箱の蓋に上て、乾坤を広く尋る物也。……曲輪を飛出て案じたらんには

・師ノ云、「発句はとり合物也。二ツとり合て、よくとりはやすを上手と云也」
・又云、(俳諧は)題の噂と覚えたるがよし。

(以上、「発句調鍊之弁」。(俳)にも有り。)

旅

・許六其一端をあげて初心に示さるゝ物成べし。曲輪の内外をしひて論ずべからず。然共、曲輪の内はすくなく、外は尤多し。

・殊に感偶即興するものは、曲輪の内よりなし来る句多し。……又、句は「題の噂と覚えたるがよし」といへるはさも有なん。

・先師告て曰、「汝(洒堂)がほつ句皆、物二ツ三ツを取合てのみ句をなす。発句は只金を打のべたる様に作すべし」とをしへ給へり。(以上、「去」にも有り。)

三・発句の事は、行て帰る心の味也。……先師も「発句は取合せものを知るべし」と云るよし、ある俳書にも侍る也。題の中より出る事はすくなき也。もし出ても大様ふるしと也。

〈発句と付句の境〉

去・去来曰、「七情万景、「心」にとゞまる所には句あり。付句は常なり。譬へば、鶯の梅にとまりて鳴といふは、ほ句にならず。鶯の身をさかさまに鳴といふはほ句也」。

〈発句は屏風の画〉

二・発句は屏風の画と思ふべし。己が句を作りて目を閉、画に準らへて見るべし。……俳かいは姿を先にして、心を後にするとなり。

〈発句の時は季に用いる事〉

二・あるいは夜着とふとん・足皮・頭巾の類、扇・あはせなど尋常に用ゐるもの多し。発句にする時は当季、平句にしては指合繰るべからず。

十・二季にまたぎたる彼岸の類も、四季にわたりたる無名の祭も、発句にすれば季となる物あり、付句にすれば雑となる物あり。(古)に「季節の跨ぎたる物の事」と有り。

〈発句の道具〉

俳・予閑ニ発明するに、発句道具・平句道具・第三道具あり。

……発句の道具は、一切動かぬもの也。

・ひとゝせ俳諧せし時、瓜の泥によごれたるはをかしとて、六句めニ、

泥によごるゝ瓜の網の目

と云句せし。其次のとし、翁の句ニ、

朝露によごれて涼し瓜の泥

と云句出たり。初て発句の道具たる事を知れり。(許六)

《発句論》では、許六の〈取合せ論〉や〈題の曲輪を出よ〉に對して、去來はやや批判的で、それは先師の教えの一端にすぎず感偶即興する句は多くは曲輪の内に入り、発句は「金を打のべたる様に」作れと言うが、土芳は発句は行て帰る心の味という秀逸な発句内部の感応説を提出したうえで、許六の説を肯定的に紹介する。また許六の「題の噂」には、去來も同意する。さらに、発句と付句の相違について、発句は視覚的な「屏風の画」であり常でない格があり、尋常の語句も当季として用い、発句の素材は「発句道具」といって他の語に動かない。発句論における季語・季題論は、取り合せ・題の曲輪そして素材としての発句道具にかかわる。

●連句論

〈去嫌／季移り〉

三・ほ句に三月に渡る景物出る時は、わきにて当季を定むべし。是は連歌の習也。俳にても其心遣ひ也。

去・ぼんとぬけたる池の蓮の実

(秋)にも有り。

咲花にかき出す縁のかたふきて ばせを (春)

……先師の付句を所望しければ、かく付給ふなり。

(秋から春の季移り)

〈輪廻・遠輪廻〉

三・輪廻の事、新式に薰といふ句に、こがるゝと付て、また紅葉を付くべからず。……又たとへば、花といふ句に、風とも霞とも付て、又不可付也。数句をへだつといふとも、一座に可嫌之、他准之。又竹と云句に世と付て、又竹出る時、夜の字不付之。如此の類遠輪廻也。

〈附句の季の案じ方〉

二・四季の附句に其季を案ずる事、前の二三句かるき時は、当季を経て趣向より案べし。……前の二三句重き時は、尤、其当季より案じて、花・鶯・月・露の類に、一句の風情を附べし。されば二つの案じかたは、もとより変化のため成る事をするべし。

〈二季に渡るもの〉

二・二季に渡るものをば、後の彼岸といひ、秋の出かはりといふ。されど前句の秋に附くる時は、後の字にも及ばず、秋季なり。此類は数多ある事なり。

〈作法書〉

二・俳かに指合の事は、『はなひ草』の類にしたがふべし。
 宇・世間重宝の『はなひ草』も、連哥の『いろは新式』と云書にて書侍れば『はなひ草』なくとも事は欠まじ。

・惣別差合の事は『新式今案』を以了簡すべし。

三・(師)「その中に『俳無言』といふ有。大様よろし」と云り。
 〈月・花〉

二・都て月花は風雅の道具なれば、なくて叶はぬ道理をしつて、さのみ月花の句に新しきをもとむべからず。

三・春秋の季つゞき、四句目にて花月の句をする事必あるまじとの師説也。

〈月〉

三・月の定座をこぼす事、師のいはく「……哥仙はくるしかるまじ。……月の座、月の字、有明も差合たる時は異名にてすべし。……」

・又師のいはく「月は上句勝たるべし。落月・無月の句つゝしむべし。時によるべし。……」

・星月夜は秋にて賞の月にはあらず。もしほ句に出る時は、す秋にし、他季にて有明などする也。月といふ字に五句隔と新式にあり。
 (二二)〈字〉〈古〉にも有り)

・師の曰「表に月二つ稀に有。此時は月数八つ也。名の裏はまれにも月なし」と也。

・師のいはく「素秋の事、せぬ方先よろし。するに習ひなし。時によるべし。」

(素秋とは秋の句三つ五句連続中に月がないこと。)

宇・『深川集』俳諧に「宵やみ」と云句、賞翫の月にせり。師云、「宵闇と云句に月は成まじ、此宵やみ、月秋の前句也。」

是を月にすべし」とて秋を付出し、八月と五月次を出せり。

(二二)〈去〉(三三)〈古〉にも有り。)

〈花〉

宇・花に初中後の心持あり。めぐむ・咲初る・盛・ちる・残るの類也。……唐朝の花は牡丹也。吾朝詩哥の花は桜也。連

俳の花は桜にも非ズ牡丹にてもなし。『篇突』二云、「花は賞翫の惣名」と註ス。

去

・去来曰、「(花を)引上るに式品あり。一は、一座に賞翫すべき人有て、其人に花をと思ふ時、其句前に至り、前句より春季を出して望む也。是を呼出しの花といふ。又一ツは、一座の貴人・功者などは……花を作す。

三

・恋の花はむつかしきわざと、連歌に秘して、前句よりつゝしむと也。俳、其沙汰なし。
 ・にはひの花にて春季五句に至るとも、揚句に季をはなすべからず。たとへ季六句に及てもすべしと也。

《連句論》

においては、季語・季題論は主に〈去嫌/季移り〉と〈月・花〉にかかわる。〈去嫌〉については芭蕉は『三冊子』で「大かたにして宜」と柔軟な態度であり、『俳無言』を推奨している。ここでは個々の語の去嫌の解説は省略した。変化を尊ぶ連句では季移りや趣向の停滞に注意がなされた。付句は趣向からと季から案ずる場合があり、二季にわたるものは前句の季に従うという。また、落月・無月・素秋・星月夜・宵闇等についての指摘がある。

恋

〈季にて恋の句つゝむこと〉

三・季にて、恋の句をつゝむこと、恋の句にて季の句をつゝむこと、むかしは嫌へども、今はくるしからず。

〈恋の発句は雑でもよい〉

去・先師の曰、「発句も四季のみならず、恋・旅・名所・離別等、無季の句ありたきもの也。 (旅) にも有り。」

《恋論》における季語・季題論は、連句の運座上の恋と季の続け方と、恋の発句と雑の関連等に論がある。前者は、『連理秘抄』『増補はなひ草』等では否定されていたが、蕉門では許容された。また恋の発句は雑でもよいとされた。

●撰集論

〈集の模様〉

去・去来曰、「俳諧集の模様は、やはり俳諧集の内にて作すべし。」

宇・夫選者は、第一自句達者にして、秀逸の句持てもをしまし、代句に書入、もやうをつくり、題と題とのつゞけ所、句の不足あれば、俄に筆をひかへ発句する程の達人ならでは、選者成がたし。

・集は第一もやう也。四季を分て、いつもかはらぬ梅・桜・月・雪、しかもよからぬ句を並べ出せる、不興の事也。
……題と前書の相違有べし。

図I堀切実氏「芭蕉俳論体系化への試み」より

《俳諧精神》

風雅のまこと
不易流行

造化随順・高悟帰俗↓
《対象把握の方法》

本意・本情
物我一如

↓
《表現の方法》

姿情(景気)
虚実
取合せ

《風調・芸境》

さび・しをり・ほそみ
新しみ・かるみ(あだ)

↓

発句論(発句構造論・切字論・季題論・等類論)
連句論(にほひ・うつり・ひびき・心付・見入・見込・見ひなし・位・俵)

〈巻頭・四季の巻頭・巻軸〉

宇・巻頭・巻軸の句、心得有べし。……四季の巻頭、一題くの巻頭あり。人を考へ句を撰みて置べし。下手の巻頭に出たるは、士民、公家の上座仕たる心地して、その集いやしまるゝ也。……
しかも季なからんを巻頭に不入之。

〈部立の事〉

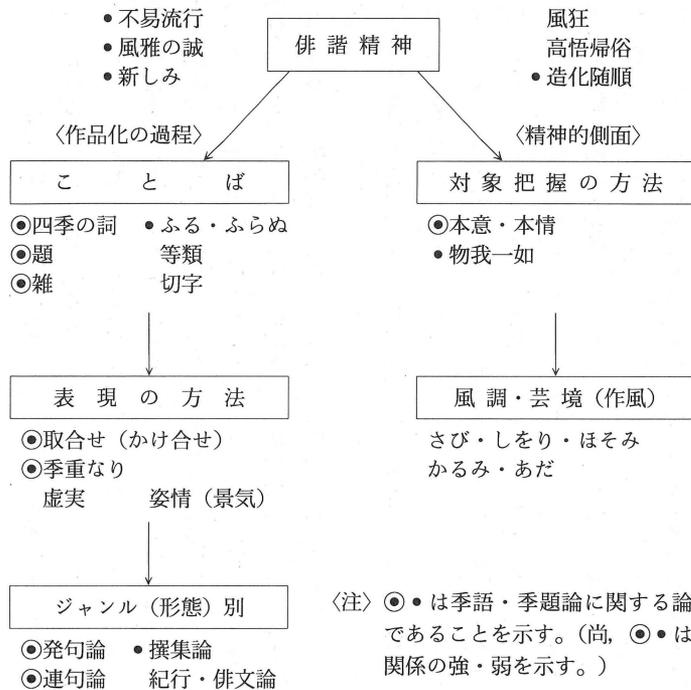
宇・部立の事、年中行事・四季景物、次第をたつる事、常の事也。発句数すくなく、あるひは二句三句同作にて、同じ所にならべざれば、其感すくなくして、題を分がたき事ある物也。其時は神祇・釈教・旅・無常と、四季不同に分べき也。

〈相似たる句〉

三・師のいはく「相似たる句は、集に出す時、外に置てまぎらはしくせざるよし。『後猿蓑』に師の蕎麦の花の句、猿雖が蕎麦の花一所にわざと置待ると也。

〈縦題・横題の並べ方〉

図Ⅱ 〈蕉風俳論における季語・季題論の領域と体系〉



字・題に縦横の差別有べし。近年大根引のたぐひを、菊・紅葉
 一列に書ならべ出する、覚束なき事也。

《撰集論》における季語・季題論は、許六の『宇陀法師』の「俳諧
 撰集法」に多く論がある。内容は〈部立諸論や句の配列〉と季語・
 季題との関連についてである。つまり、撰者は集の模様を工夫すべ
 きであり、巻頭・四季の巻頭・巻軸の句を吟味し、巻頭は季の句が

必要である。また似た季語の句は一所におき、縦題・横題の配列に
 も工夫が必要であるという。

三 蕉風俳論書の季語・季題論の体系

以上のように、蕉風俳論書における季語・季題論のさまざまな言
 説を概観してきたわけであるが、ここでそれらの全体像を確認して
 みたい。いかなる領域で、いかなる体系で季語・季題論が語られて
 いるか考えてみる。

堀切実氏は前述の「芭蕉俳論体系化への試み⁶⁾」の論文において、
 図Ⅰのように〈芭蕉俳論の構造〉を体系的・統括的にとらえておら
 れる。すなわち、《俳諧精神》↓《対象把握の方法》↓《表現の方法》
 ↓《風調・芸境》という一筋の脈絡をもって全体像を図示しておら
 れる。これは、妥当なひとつの魅力的な構造図であるが、〈季語・季
 題論〉の体系化にさいして、堀切氏説を参照しつつあらたに試みて
 みた。

図Ⅱは、〈蕉風俳論における季語・季題の領域と体系〉を示した図
 である。《俳諧精神》をもとに、作品化の過程として《ことば》
 ↓《表現の方法》↓《ジャンル(形態)別》があり、またより内面
 的・精神的な側面として《対象把握の方法》↓《風調・芸境(作風)》
 がある。また、図Ⅱのなかの◎・●は、季語・季題論に関する論であ
 ることを示している。◎はより季語・季題と関係の深い論であり、
 ●は部分的に季語・季題論にかかわる論である。

図Ⅱで明らかなように、《俳諧精神》では「不易流行」「風雅の誠」
 「新しみ」「造化随順」において、《対象把握の方法》では「本意・本

情「物我一如」において、『ことば』では「四季の詞」「題」「雑」「ふる・ふらぬ」等において、『表現の方法』では「取合せ」「季重なり」において、『ジャンル・(形態)別』では「発句論」「連句論」「撰集論」において季語・季題論が述べられている。つまり、『風調・芸境(作風)』以外は、季語・季題論とかわわっている。蕉風俳論における季語・季題論は広領域に及んで論じられていることが確認できた。

また、芭蕉の個々の門人における季語・季題論の論じ方の特色は、許六は取合せ・題の曲輪をいでよ・四季の詞の個々の解説など、ことばの素材性とその複合的機能に注目している。去来は本意・本情を踏まえたうえで、個々の作品によって柔軟に論じ、許六の独創的な言説にやや批判的である。土芳は不易流行を踏まえつつ、許六・去来等の説を踏まえながら、許六にも傾斜して四季の詞の解説も試みている。其角は縦横題の指摘の他は一般的な論であった、支考も一般的な論であり四季の詞の解説も試みているが、生彩がない。

芭蕉自身の言説は、「造化にしたがひて四時を友とす」「桐の実見付たる、新敷俳諧の本意」「静にみれば物皆自得す」「季のつかひやうは、かろくやすらかに」など、造化に従い四時の中で、万物を静観して本質を見極め、新しい本質に突き抜けて詩を活性化させ、季の詞はさりげなく用いるというものであった。すなわち、俳諧本質論にも対象把握にも四季の詞の解説にも表現方法にも展開可能なものであった。

なお、これらの蕉風の季語・季題論における独創性の考察も必要であろう。中世の連歌論書や同時代の俳論書における季語・季題論との比較検討により、蕉風の季の詞についての論の特色の抽出も、

今後試みてみたい。

註

- (1) 夏石番矢編『俳句「百年の問い」』(平成七年一〇月刊、講談社学術文庫)
- (2) 山本健吉氏「季の詞—この秩序の世界」(『芭蕉の本4』昭和四五年刊、角川書店)
- (3) 井本農一氏「季語の文学性」(『俳文芸の論』昭和二八年刊、明治書院)
- (4) 堀切実氏「芭蕉俳論体系化への試み」(フェリス女学院大学『国文学論叢』、平成七年六月刊)
- (5) 尾形仂・堀切実編「芭蕉俳論事典」(別冊国文学8『芭蕉必携』、昭和五五年一二月刊、学灯社)
- (6) 註(4)に同じ。

(あずま しょうこ・日本文学)